

〔文学篇〕

【論文】

この手に握られた、不毛の王笏

——『マクベス』における性欲とボディ・ポリテック

松岡浩史

“a barren sceptre in my gripe”——Sexual Desire and the Body Politic in *Macbeth*

Hiroshi MATSUOKA

要旨

Sexual allusions and puns rampant in the text of *Macbeth* cannot be pretermitted just as the dramatist's word games considering their quality and quantity. The plot of the play furnishes the portrait of a man whose end is only to satisfy his political/sexual desires, lying outside the circle of generation. With the reference to the sources of social history, anatomy and demonology, this paper reveals the double-structure of the play, where political ambitions are always replaced by sexual metaphors. As Macbeth's political sterility parallels his sexual dysfunction, the king's political body, which was supposed to be invisible, is relentlessly visualized by the embarrassed body of the protagonist.

キーワード：王権、魔女、ボディ・ポリテック、セクシュアリティ

序

シェイクスピア (William Shakespeare) の喜劇が主に結婚前の男性の性欲を弄ぶ構造になっているのに対し、結婚後の言わば「後日談」が描かれる悲劇においては、むしろ女性の性欲が前景化されていることは興味深い。『ハムレット』 (*Hamlet*, c.1600-2) に登場する王妃ガートルードは早すぎる再婚を性欲のなせる業と実の息子に罵倒されるし、『リア王』 (*King Lear*, c.1604-6) におけるゴネリルやリーガンは、自らの夫に飽き足らず、経済的、政治的な利益にはならない私生児エドモンドを性欲の対象として奪い合う。『オセロー』 (*Othello*, c.1602) では、ちょうど結婚を境にして、夫は妻デズデモーナの不貞、すなわち性欲を妄想することになる。

さて、『マクベス』 (*Macbeth*, c.1606) における性欲の問題は、これまでジェンダー論の陰に隠れてあまり論じられることがなかった感がある。しかし、そのテキストに蔓延する性的な仄めかし (allusion) や駄洒落 (pun) は、その質と量の点で単なる言葉遊びとして看過できないレベルで多用されており、本劇作品の悲劇性と性欲のメタファーのあいだには、いいかえれば作品が提示するテーマとその手法のあいだには、何らかの構造的な辻褄、ロジックが隠されていることを予見させるのである。

ゲイル・パスター (Gail K. Paster) が『屈辱の身体』 (*The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England*, 1993) において、初期近代における身体的偏見を明

らかにして以来、この影響下にある、ガレノス体液理論に基づいた演劇分析が新しい批評の潮流を作っているが、作品の文化背景論にとどまらずにドラマツルギー論にまで昇華させている例は少ないといっている。ジュリー・バーマゼル (Julie Barmazel) はマクベスの性的不能性を指摘し、このことと『マクベス』のプロットとの相関を論じた非常に有益な研究を提示しているが、ジェームズ朝における国家身体の隠喩というコンテクストを欠いているため、御前公演として意識された本劇作品の政治性に踏み込めていない。畢竟するに、『マクベス』のプロットとは何であったか。それは、継承権を約束されない男が、欲望を第三者によって植え付けられたときに何が起こるか、というシミュレーションであり、また、その植え付けられた欲望が、擬似的な達成を見る物語である、ということができよう。本稿では、王権篡奪のドラマである『マクベス』に表象される性欲が、そのプロットにどのように織り込まれているかを、同時代の社会史、解剖学、悪魔学の資料を参照し明らかにしたい。なお、シェイクスピアの引用はすべて *The Arden Shakespeare, 3rd Series* に拠る。

I. 国王の身体の二重性

エルンスト・カントロヴィチ (Ernst Kantorowicz) の研究が明らかにしているように、西洋の国王は自然的身体と政治的身体という二つの身体を有しており、自然的身体が mortal (死すべき存在) で生物的な虚弱性に常に脅かされるのに対して、政治的身体はそのようなあらゆる欠損や弱さを免れた不可視の存在とみなされていた。¹ また、ジョナサン・ハリス (Jonathan Gil Harris) は、初期近代の有機的政治体が、演劇やパンフレットによって、ルネサンス生理学、疾病分類学、病理学の知見を援用して病気のアナロジーで語られていたことを指摘している。シェイクスピア時代における国王の身体がこのような二重性をもって表象されていたことは、ジェームズ一世 (King James, 1566-1625) による1603年の議会演説からも明白である。

私は夫であり、この島 [ブリテン島] のすべては私の合法的な妻である。私は頭部であり、この島は私の身体である。私は羊飼いであり、この島は羊の群れである。したがって、私が福音の下、キリスト教の国王であることを不当と考えるものはいないことを期待する。つまり私は一夫多妻者で、二人の妻の夫なのだ。私は頭部であり、分割され、怪物的な身体的所有者であると同時に羊飼いとして、4つの海以外に生垣となる境界を持たない群れを率いているのである。

King James, *Speech of 1603*, 272

民衆を束ねる羊飼いとしての統治者ジェームズは妻たる国家に対しては夫であり、身体たる国家に対しては頭である (I am the Head, and it is my Body) と言う。このことから、初期近代イギリスにおいて、国家と家庭、そして政治的身体と自然的身体のあいだにはメタフォリックな関係が結ばれていたことがわかる。² 言い換えれば、ボディ・ポリティックのメタファーは、国王の自然的身体の表象によって国家の在りようを理解する手掛かりを提供してくれているのである。だとすれば、まさにリチャード三世 (Richard III, 1452-1485) の「歪んだ」身体がチューダー朝神話の確立に貢献したように、マクベスの身体にかんする表象を手掛かりとして、彼の統治する国家を占うことができるだ

ろう。

II. 生殖と王位の継承

『マクベス』の劇世界においては、親子の絆、とりわけ父親と息子の絆が強調されている。ダンカンが政治的身体としては、かつて国家の父であり、同時に自然的身体においてはマルコムとドナルベインの父であった。バンクォーは劇のはじめから暗殺される瞬間まで、息子のフリーアンスを同行して登場する。³ マクダフとその早熟な息子、そしてシーワードとその息子小シーワードもまた、劇の後半において、観客に父と子の絆を思いださせる役割を果たしている。

冒頭で述べたように、シェイクスピアの作品の多くは結婚や夫婦関係の破綻など、家族問題を扱っているが、劇作品以外にも、『ソネット集』(*The sonnets*, 1609)においては「美の継承」という大きなテーマが謳われるなかで、親子の意味について次のように言及されている。

君の外見通り、優雅で、優しくあってほしい。
 さもなくば、自分自身だけにでも優しく接してほしい。
 私を愛しているのなら、もう一人の君 (another self) を作ってほしい。
 美が子どもや君のなかで永遠に生きるように。

The sonnets, 10

ここで、子をもたらしことが「もう一人の君」(another self) の創造と表現されているように、シェイクスピア作品における親子間の継承は、自己の複製・再生産を意味することが多い。『ソネット集』において継承されるべき対象とされる「美」は、歴史劇においては当然のことながら「権力」に置き換えられていく。

『マクベス』の劇世界において、このような再生産の領域の外側にいるのは、マクベス夫妻を除けば三人の魔女 (weird sisters) と暗殺者だけである。魔女の一人が第1幕第3場において、アレッポにいるタイガー号の船長を「干し草みたいに干からびさせてやる」(I'll drain him dry as hay, 1.3.18) と言うとき、ジェームズ一世のように大陸の魔女理論に通暁していた観客であれば、即座に男性の生殖能力を枯渇させるサキュバス (Succubus) という名の夢魔をイメージできたはずである。15世紀の異端審問官、ハインリヒ・クラマー (Heinrich Kramer, c.1430 - 1505) とヤーコプ・シュプレングー (Jacob Sprenger, c.1436 - 1495) が著した悪名高い魔女裁判のマニュアル本、『魔女たちに与える鉄槌』(*Malleus Maleficarum*, 1486) には、人間の性交に悪魔が介入することについて、次のような記述がある。

しかし悪魔はこの生殖 (generation) において不可欠な原因としてではなく、二次的な、そして人工的な原因として役割を果たすと主張することができる。というのも、悪魔は通常の性交と受胎を阻害し、人間の精子を獲得して、それを自身で移植することに精を出すからである。

Malleus Maleficarum, 21-22

このような男性の生殖能力を奪う夢魔は、男から精液を抜き取ることによって、通常の性交や妊娠を妨害するとされていたのである。かくして、魔女たちが語る台詞は『マクベス』のプロット上に不毛のイメージを植え付けていく。

バンクォーを殺害する暗殺者たちは、言うまでもなく、不法に継承を断絶させる存在であり、このような再生産と継承を妨げる一団と手を組むことによって、マクベスは、法に則った人間の生産活動 (fruitfulness) のアンチテーゼとして、相続者のいない自らの状況と、その不毛性 (barrenness) を際立たせているといえるだろう。家族における相続者の不在は、国家においては、第一義的には直系の継承者の不在を意味する。『マクベス』における王位継承の問題は、ボディ・ポリティックのメタファーを通じて、とりもなおさずマクベス自身の自然的身体の生殖能力、すなわち、世継ぎとなる男子をもうける能力の問題に還元されることになるのだ。では、なぜひとりマクベス夫妻のみに子供がないという設定をシェイクスピアは選んだのか？⁴

マクベスは、第1幕、魔女の予言を聞くとすぐに妻に手紙を送り、「偉大なる地位をともに分かち合うべき愛しい伴侶」(dearest partner of greatness, 1.5.9-10) とマクベス夫人に妻として最大限の愛情を表現し、また第3幕においても同様に、「愛しい妻」(dear wife, 3.2.37)、「かわいいお前」(dearest chuck, 3.2.45) と愛をこめて呼びかける。シェイクスピア作品には多くの夫婦が登場するが、マクベス夫妻ほど愛情に満ちた関係性を築いているペアが他にいるだろうか。「夫と妻は一心同体」という同時代の夫婦の原則を受け入れていることを物語るこの夫婦の関係性は、逆に二人の間に子供がないことに幾ばくかの違和感を観客に覚えさせ、夫婦の生殖能力になんらかの問題があるのではないか、という疑念を惹起させずにはおかない。第1幕の終わりに明らかになるのは、夫妻に子供がないのはマクベス夫人に出産の能力がないからではない、ということである。

私はね、赤ちゃんにお乳をあげたことがありますからね。(I have given suck)
 乳房を含む赤ちゃん (the babe that milks me) のいとおしさはよく知っていますとも。
 でも、私の顔を見上げてにこにこ微笑むその赤ん坊の柔らかな歯茎から
 乳房をもぎ取ってね、脳みそ (brains) を、こう、たたき出して見せますとも、
 誓ったからには。

Macbeth, 1.7.54-59

「赤ちゃんにお乳をあげたことがありますからね」(I have given suck) という台詞から、マクベス夫人には、どうやら子供に母乳を与えた経験があるらしいことがわかる。『マクベス』の材源となったホリンシェッド (Raphael Holinshed, d.1580) の『年代記』第2版 (*Chronicles of England, Scotland, and Ireland*, 1587) の記述によれば、マクベス夫人が前夫との間に儲けたルーラッハ (Lugtake, 在位 1057-58) がマクベス (在位 1040-47) の死後、王位に就いている。ところが、シェイクスピアの『マクベス』においては、マクベス夫人の再婚については一切言及されることはなく、ただ乳幼児の頭から脳みそをたたき出す、といった残虐な乳幼児殺し (infanticide) についてグロテスクな想像をすることが出来る女性として描かれるばかりである。

人口学者のエドワード・リグリー (Edward A. Wrigley) とロジャー・スコフィールド (Roger S.

Schofield) によって前工業化時代のイングランドにかんして作られた人口モデルでは、死亡総数の34.4%は10歳以下の子どもであり、6.7%だけが80歳以上の大人であった、と推定されている (66)。また、1550年から1649年までの期間の8つの教区の実際の記録を調査して、リグリーとスコフィールドは、生まれてくるすべての子どものほぼ4分の1は10歳まで生き延びることができず、死亡率が最も高いのは抵抗力の弱い、生まれて最初の1年である、ということを立てた。⁵ シェイクスピア時代は、子供5人に1人は1歳になる前に死んでしまい、裕福な一家においてでさえ、子孫を残せれば幸運だと思われる時代であった、とトマス・ラカー (Thomas Laqueur) も指摘する (141)。劇中では描かれない、自らが授乳した子供について言及するマクベス夫人の台詞からシェイクスピア時代の観客が想像するのは、当時ありふれていた、夭折した子どもを持つ一人の母親であったかもしれない。

ヘンリー八世 (Henry VIII, 1491-1547) の主治医であった、トマス・ヴィカリー (Thomas Vicary, 1490?-1561/2) が著した医学書、『人体の解剖』(*The Anatomie of the Bodie of Man*, 1548) には、胎児が形成されるプロセスが次の四段階に分けて論じられている。

胎児は次に述べるような四つの段階を経て形成される。第一段階では、前述の精液つまり種子 (sperme or seede) が弛緩しており、まるで母乳のような状態である。第二段階にこれが別の種類に変化するのであるが、それでもまだ血液の塊に過ぎない。これが、ヒポクラテスのいわゆる胎児 (Fettus) である。第三の段階では、心臓、肝臓、脳といった主要な器官が形成される。最後の第四段階では、すべての器官が完全に形成され、生命と呼吸を伴った魂 (soule) を受け入れることによって、それ自体で自律的に動き始める。

The Anatomie of the Bodie of Man, 80

胎児の生成にかんしては、順に精子、血液の塊、脳を含む臓器、そして魂の形成という過程を辿ると説明されているが、ここで精液が「まるで母乳のような」(as it were mylke) と喩えられているように、シェイクスピア時代のワンセックス・モデルに従えば、血液、精液、母乳はすべて代替可能な体液であった。精液、母乳から、血液へ、そして脳の形成という一連の生殖プロセスにおけるキーワードならびにそのイメージが前述のマクベス夫人の台詞のなかに参照可能であるように、そのグロテスクな幼児殺しの比喩は、ただその残虐性を露わにするだけでなく、マクベス夫人の出産に対するオブセッションを浮かび上がらせるものであるといえる。というのも、この擬似的な授乳のイメージは第1幕第5場におけるマクベス夫人の悪霊への呼びかけ (invocation) の場面でも用いられているからである。

さあ、死の思いにかしづく悪霊たち
いまこそ私を女でなくしておくれ (unsex me)。
私の全身になみなみと頭の上からつま先まで
残忍と冷酷をみなぎらせておくれ。私の血を
ドロドロにして (Make thick my blood)、
憐れみに通ずる血の管 (th'access and passage to remorse) を

塞いでしまうのだよ。せっかくの恐ろしい目論見に
 良心の呵責などが揺さぶりに入って (compunctious visitings of nature)、
 なまじ実行を押しとどめることのないように。
 さあ、人殺しの手先ども、私の乳房にとりついて
 甘い汁を苦い胆汁とっておくれ (take my milk for gall)。
 お前らは目に見えぬ姿のまま、この世の悪事という悪事に
 手を貸しているのだから。

Macbeth, 1.5.40-50

ここで述べられる、「人殺しの手先ども、私の乳房にとりついて、甘い汁を苦い胆汁とっておくれ」(Come to my woman's breasts/And take my milk for gall, you murdering ministers) という台詞は、これまでに多様な解釈を生んできた。アーデン版第2版の編者であるケネス・ミュアー (Kenneth Muir) は、「母乳をとりさって、そこに胆汁を注ぎ込んでおくれ」(Take away my milk, and put gall into the place) というサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) の解釈、「胆汁に変わった私の母乳を飲むがいい」(Nourish yourselves with my milk which... has turned to gall) というニコラス・デリウス (Nicholas Delius) の解釈、そして take を「感染させる」(infect) ととるトマス・カイトリー (Thomas Keightley) の解釈を列挙し、カイトリーの解釈が最適であるとしている。なるほど『マクベス』というドラマのプロットに照らし合わせれば、ダンカン王殺害の勇気を得るために、女性的な性質の体液である母乳を勇猛な胆汁に変換する、という解釈には妥当性があるが、メタファーのレベルでは、この台詞は禍々しい授乳のイメージを喚起させずにはおかない。そしてそのイメージが及ぼす効果とは、いまだマクベス夫人の生殖能力が健在であること、その女性性 (femininity) の強烈なアピールであり、「女でなくしておくれ」(unsex me) と悪霊に呼びかけるのもまた、過剰な女性性を備えていることの裏付けに他ならない。

このようなマクベス夫人の性的アピールは、「良心の呵責などが揺さぶりに入って」(compunctious visitings of nature) という言葉においてより露骨なかたちで反復される。ゴードン・ウィリアムズ (Gordon Williams) は、『シェイクスピアの性的言語用語集』(*A Glossary of Shakespeare's Sexual Language*, 1997) において、“visiting” を「月経の始まり」(onset of menstruation) と定義しているが、事実、visiting of nature とは、ルネサンス期においては月経の口語的表現であった。以下に続く「私の血をドロドロにして、憐れみに通ずる血の管を塞いでしまうのだよ。」(Make thick my blood/Stop up th'access and passage to remorse, 1.5.43-44) という台詞からも同様に、生理学のコノテーションを読み取ることができる。ルネサンス期においては、子宮からの血液が排出される器官の管は、しばしば “passage” と表記されており、血液を濃くすることによって通路をせき止めるとは、子宮へ至る血液の流れを止める、すなわち閉経あるいは月経の停止を意味する暗喩に他ならなかった。

このような、マクベス夫人の肉体に対する執着と強調されるその生殖能力は、彼女の過剰な女性性を明らかにすると同時に、パートナーたるマクベスの生殖能力をむしろ疑問視させるものである。マクベスの身体は、この「一心同体の」夫婦関係においてどのような役割を果たしているのだろうか。

Ⅲ. マクベスの自己充足的性欲

本劇作品における政治的野望と性的欲望の二重構造をもっとも明確に物語っているのは、マクベスがダンカン王を殺害するさい、自らを、ルクリースを凌辱するタークインに喩える場面である。

魔術は青白いヘカテに貢物をし、やせこけた
殺人は、見張りの狼に起こされ、
その唸り声にけしかけられるように、抜き足差し足、
ルクリースを凌辱しにいくタークインの足取り (With Tarquin's ravishing strides) で、
目指す相手めがけて亡霊のように忍び寄っている。

Macbeth, 2.1.51-5

ダンカン王殺害はマクベスにとって性的な凌辱行為であるらしい。そうであるならば、マクベスによる王権篡奪はホモセクシュアルな性交渉という、もとより再生産・継承を約束されない行為であったことになる。⁶ このような権力欲と性欲の交換可能性は、王位を得ることにかんするマクベスの心の動きが、ことごとく性のメタファー、とりわけ、マクベスの男性器の表象をつうじて描写されていることから明らかである。第3幕第2場、ダンカン王殺害の後、マクベス夫人はマクベスに対して、「どうしていつもおひとりなの」 (why do you keep alone) と問いかける。

何にも残らない、むなしい消費 (Naught's had, all's spent)
満足を得られない欲望なら
いっそ殺された方がかえって安心、
殺して手に入れても残るのは疑わしい喜びばかり (doubtful joy)。

マクベス登場

あなた、どうしていつもおひとりなの。
あなたの道連れは物悲しい妄想 (sorriest fancies)、
ただもう考え込んでばかり。
そんな考えはねえ、考え込んでいる相手と一緒に
死んでしまったはずでしょう？

Macbeth, 3.2.5-13

マクベス夫人は、ダンカン王殺害が「何も後に残らない虚しい消費」 (Naught's had, all's spent) であるという。そしてそこには、「満足を得られない欲望」 (our desire is got without content) だけが渦巻いている。殺害が性欲の成就であるのなら、そこには「疑わしい喜び」 (doubtful joy) しか残らない。ダンカン王殺害の裏に垣間見えるこの性的コノテーションに従えば、マクベス夫人の満たされない性欲と、ひとり妄想に身をゆだねることを好むマクベスの自己充足的欲求が浮かび上がる。マク

ベスの欲求は、手 (hand) と、男性器のイメージによって、如実に、そして執拗に描き出されるのである。

マクベス

思いもよらぬ考えが頭に萌しては、すぐさま手 (hand) へと移る。
行動に移さねばならぬ、考えるのは後回しだ。

マクベス夫人

あなたには自然が与えてくれる滋養である眠りが必要です。

マクベス

来なさい、一緒に寝よう。私の奇妙な妄想は、
厳しい鍛錬が必要な (that wants hard use) 新参者の臆病風だ。
俺たちは行為にかけてはまだ幼稚なのだよ。

Macbeth, 3.4.137-42

「思いもよらぬ考えが頭に萌しては、すぐさま手へと移る」(Strange things I have in head, that will to hand)。そして、「私の奇妙な妄想は、厳しい鍛錬が必要な新参者の臆病風だ」(My strange and self-abuse/Is the initiate fear, that wants hard use)。この一連の台詞の常識的な解釈は、マクベスの行動力が罪を犯すだけ十分に堅固 (hard) ではない、ということであるが、パーマゼルも指摘するように、“hard use” や “self-abuse” といった言葉には自慰のコノテーションが付き纏う (122)。

マクベスは、ダンカンの亡霊を見ることは一度もなく、バンクォーの亡霊によってのみ苛まれるが、この事実は、再生産という観点における、マクベスのバンクォーに対する特別なオブセッションを物語るものだろう。バンクォー暗殺前に、マクベスは魔女の予言を思いだすことになる。

おれの頭上には実を結ばない王冠を載せ、
この手に握らせた不毛の王笏を (a barren sceptre in my gripe)、
血のつながらない手によってもぎ取らせるのだな。
おれの息子がこれを継ぐことはないのだ。

Macbeth, 3.1.60-63

「この手で握る、不毛な王笏」(a barren sceptre in my gripe) とは、生殖へと結びつかないマクベスのファリック・イメージのもっとも端的な表象である。同様に、第3幕第5場に登場するヘカテは、マクベスを「自分の “end” (目的) だけをかわいがる男」(who.../Loves for his own ends, 3.5.12-13) と言う。“end” はここで、「目的」すなわち政治的な野望を表すと同時に、「先端部」すなわち男性器の暗示でもあり得る。さらに、第5幕第2場、アンガスはダンシネインに籠城するマクベスを「秘かな殺人の証拠が手にこびりついている」(His secret murders sticking on his hands, 5.2.17-18) と描写するが、ダンカン王殺害が凌辱のメタファーで語られ、そして当時の解剖学が血液と精液を可逆的な

体液と想定していた以上、シェイクスピア時代のコンテキストにおいては、マクベスの手にこびりつくダンカン王の血液の描写は同時に、マクベスの精液の暗喩として働き始める。

また、第1幕第7場、マクベスが妻に、「男だけを産むがいい」(Bring forth men-children only, 1.7.73) と言うとき、この夫妻のジェンダー・ロールは現代の観客には解りづらい揺らぎを見せている。というのも、18世紀に卵子が発見されるまで、女性も精液を出すと考えられており、強い精液が男の子を、弱い精液が女の子を生みだすとされていたからである。⁷ 血液、精液、母乳などの分泌物は互いに入れ替わり、人間の身体は代替可能な体液で構成されていると考えられていたルネサンス期において、マクベスとマクベス夫人の性的役割が容易に変わるのとは違って、なんら不思議なことではない。この台詞は、マクベス夫人の「精液」が強力であることを意味すると同時に、彼女の単為生殖 (parthenogenesis) すら仄めかす台詞であり、マクベスの生殖における役割を完全に疎外するものであるといえる。

このような、決して生殖に結びつかないマクベスのファリック・イメージは、ダンカン王殺害の直前に見える短剣の幻覚のごとく、頼りない存在である。マクベス夫人は、「勇気を振り絞るのです、そうすれば失敗などするものですか」(screw your courage to the stickingplace,/And we'll not fail, 1.7.61-62) とマクベスの勇気を引き絞られた石弓に喩えるが、“courage”には欲望のコノテーションがあり、ここでもやはりマクベスの性的不能性を暗示してしまう。これに応じるかのように、マクベスは、「よし、決心はついた。この大仕事には鎌首をもたげてかかろう」(I am settled, and bend up/Each corporal agent to this terrible feat, 1.7.80-81) と、まさに肉体のエージェントを上方へ振り返らせ (bend up)、ダンカン王殺害へ勢い勇む。しかし、殺害後の第2幕第2場、「マクベスは眠りを殺す」(Macbeth does murder sleep, 2.2.37) という幻聴を耳にしたマクベスの精神は、とたんに「緩んだ」(unbend, 2.2.46)、そして「萎えた」(infirm, 2.2.53) 決意としてマクベス夫人に擲擧されてしまう。

マクベス夫人の夫に対する執拗な「男らしさ」の強要は、性的なコンテキストで観察されるとき、より一層、継承されない王権にかんする悲劇性を増幅させるものである。「でもあなたの性質が気がかり。人間の情のやさしいミルクが多すぎて、強引に近道が選べない」(Yet do I fear thy nature/Is too full o' th' milk of human kindness, 1.5.16-7)、「それでも男ですか」(Are you a man? 3.4.54)、「なんて男らしくない愚行でしょう」(What? Quite unmanly in folly, 3.4.71)。このように、マクベス夫人が突きつける「男性性」は、次第にマクベスのセクシュアリティを脅かしていく。政治的な野望は、マクベス夫人によっても、性欲に置き換えられていくのである。

これからは、
あなたの愛もそんなものと思うことにします。
恐れているのね。自らの行為 (act) と勇敢さ (valor) を
自分の欲望 (desire) と一致させるのが。

Macbeth, 1.7.38-41

あの勇気のあったころのあなたは、
真の男 (man) でした。それ以上のことをやることによって

あなたはますます男らしい人間 (so much more the man) になるのですよ。

Macbeth, 1.7.49-51

マクベス夫人にとっては、マクベスが自分自身の政治的・性的欲望 (desire) と、実際の行為 (act) を、すなわち、王の殺害・夫人との性行為を一致させることが、夫の愛情を図る試金石となるらしい。このように、マクベスの夫としてのアイデンティティは、政治的・性的実行能力によって定義されてしまう。

ことほど左様に繰り返されるマクベスの自己充足的性欲と性的インポテンスの表象が明らかにするのは、マクベスの「子を産む」という点にかんする生殖能力の欠如であると同時に、精液の自己完結的な虚しい消費、擬似的な欲望の成就であるといえる。今いちど、ボディ・ポリティックのメタファーを思い出すならば、斯様な自己愛、生殖を目的としない消費は、マクベスの継承されえない政治的身体そのものであるといえるだろう。マクベスは政治的身体においても、自然的身体においても、後継者を創造できない「欠損者」そのものとして描かれるのである。⁸

IV. 子宮の病 —“The Suffocation of the Mother”

マクベス夫人は、プロット上では、ダンカン王殺害に起因する良心の呵責によって、心の病に侵されてしまう。しかし、「性欲」というキーワードに照らして眺めてみると、そこに浮かび上がるのは、彼女の出産にかかわるオブセッションである。初期近代イングランドの社会ストレスと精神病を研究したマイケル・マクドナルド (Michael MacDonald) の『神秘的なベドラム』 (*Mystical Bedlam*, 1981) によると、医者であり占星術師でもあったリチャード・ネイピア (Richard Napier, 1559-1634) のもとにカウンセリングに訪れた患者の中には不妊に悩む女性が一定数含まれていた (MacDonald, 82)。

マクドナルドは、その典型として、アビゲイル・ブラウン (Abigail Browne) という名の女性のケースを紹介している。乳幼児が死亡したさい、ネイピアのもとを訪れたアビゲイルは、「出産にずっと悩まされていて、これ以上子供を産めないことに怖れと悲嘆を感じていた」という。さらに、カウンセリングに訪れた女性患者のうち2人が、不妊 (barren) であることを中傷されたと悩みを打ち明けている。子供への虐待や育児放棄などを行った母親は周りから狂人としてなぶり者にされたらしい。さらに、新生児殺し (infanticide) を行った母親アリス・グッドチープ (Alice Goodcheap) はネイピアによって譫妄状態 (light-headed) と診断されている。無論、このような不妊や新生児殺害に対する隣人からの非難はシェイクスピア時代に限ったことではないが、注目すべきは、当時このような新生児にかんする悲劇は、つねに悪魔や魔術と結び付けられていたということである (MacDonald, 83)。その意味で、悪霊への呼びかけで始まるマクベス夫人の衝撃的な授乳のイメージは、同時代の新生児殺しの通念が反映されているといえることができるだろう。

また、歴史学者キース・ライトソン (Keith Wrightson) は、初期近代イングランドにおいて、子供ができないことは格別不名誉なこととはみなされず、離婚や合法的別居の根拠とはならなかったと前置きしながら、個人にとっては大きな悲劇だった、と論じる (Wrightson, 171)。これは当然、自らの血統に関心を持つものにとって、子どもは家系の継続を保証するものであるからに他ならない。

じじつ、シェイクスピア時代に流布した共通祈禱書によれば、結婚の目的は第一に男子をもうけ、

家系を存続させることとされていた (Stone, 44-45)。社会史学者デイヴィッド・クレシー (David Cressy) によれば、初期近代において出産は結婚した女性の義務であり、結婚式が行われる場合は、結婚が出産を目的としたものであることが念押しされ、出産とは神の法に完全に則ったキリスト教徒としての義務であるとされていた。⁹ また、消化・出産・月経・出血などの身体作用は、18世紀以降のようにはっきりと区別されておらず、出産は排泄の一種ともみなされていたため、不浄で汚染されたものであるという認識もあったのである。そこで、信心深い著述家たちは出産について述べる際に必ず分娩の穢れと産褥の血 (spot of child-bed taint) について言及したという (Cressy, 19)。マクベス夫人は、譫妄状態で、「落ちない穢れ」について言及する。

消えておしまい、このいやな染み (dammed spot) ! 消えて! 一つ、二つ、
 そうら、時間ですよ。地獄はなんて暗いだろう。
 どうしたの、ねえ、あなた、仮にも戦に出る男でしょう、それで怖いのか?
 誰に知られたって怖いことなんてあるものですか、
 私たちを非難できる者なんていやしない。
 でもねえ、あんな老人の体にこれだけの血が流れていたなんて。

Macbeth, 5.1.35-40

ここでの「染み」(spot) とは、第一義的にダンカン王殺害で流された血であることは言うまでもない。しかしよく見ると、「仮にも戦に出る男でしょう」(Fie, my lord, fie, a soldier) とマクベスの男性性の欠如、すなわち性的インポテンスの原因であるかのように、述べられていることがわかる。マクベス夫人が狂気のさなかに叫ぶこの「染み」とは、同時に、「かつて母乳を与えたことがある子ども」を出産したときの産褥の血であり、また、マクベスの不能によって決して出産へと到達しない彼女の月経血をも暗示する。

シェイクスピア時代、精神の不調は体液バランスの問題とされていたため、平均的な外科医であれば、マクベス夫人に瀉血などを施して体液の調節を試みたはずであるが、驚くべきことに、マクベス夫人を診断する医者は、彼女の症状に対して、完全に匙を投げてしまう。

この病気は私の治療ではどうにもなりません (beyond my practice)。
 しかし、夢遊病でうなされながらも
 ベッドで神聖に亡くなった (died holily) 人も知っています。

Macbeth, 5.1.59-61

この医者 の 台詞からも、夢遊病に犯されることは悪魔の作用力であると想定されていたことがわかる。シェイクスピア時代の魔女論争において、レジナルド・スコット (Reginald Scott, c.1538-1599) をはじめとする魔女弾劾否定論者たちは、魔女や悪魔の存在そのものを否定したのではなく、魔女とされた人間はメランコリーに犯された病人であると考えていた。そしてその顕著な疾患は、“retention of the month”、つまり、月経血の滞留であった。そしてこのような血液の滞留は、多くの女性がかかる病気の原因とみなされていたのである。なかでも、最も悪名高いものはヒステリーの原因とされた子

宮の病である“suffocation or strangling of the womb”、またの名を“suffocation of the Mother”あるいは“hysteria passio”である。この病は、喉の詰りによる窒息を主な症状とし、潜在的に死に至るとされていた。同時代の医者、フィリップ・バロー（Philip Barrow, fl.1590）が1596年に著した『医術の方法』（*The Method of Physic, Containing the Causes, Signs, and Cures of Inward Diseases in Man's Body from the Head to the Foot*）は、この病気の原因について次のように説明している。

子宮の閉塞あるいは圧迫は、身体の上部に引き上げられるものに他ならない。この病は、月経血の滞留が充満した後によって引き起こされる。[中略]この種の病はすべての季節に生じうるものであるが、特に冬や秋に生じやすい。最も一般的に罹患するのは、若くて好色な不妊の女性である。

Barrow, *The Method.*, 191-2

バローの記述は、好色で不妊の若い女性が、子宮に血液の滞留を最も起こしやすく、この病気にかかりやすいとされていたことを示唆する。ルネサンス期の特異な診断法では、女性が欲望過多であるのは不妊の原因の一つとされた。月経がなかったり短すぎたりする不順は、種子を焼き尽くす熱の過多とされた。ラカーによると、不妊や無月経症に対する一般的治療においては、熱とオルガスムスこそが肝心の要素だった。マクベスのインポテンスはこの意味で、同時代の医学理論ではマクベス夫人の病の原因となりえたことになる（Laqueur, 141）。『マクベス』のドラマは、ワンセックス・モデルにおける性の転倒—マクベスとマクベス夫人の生殖におけるジェンダーの交換—によって突きつけられる男の役割が悲劇の大きな要素となっているのである。

V. 結論

国王となり、政治的身体を手に入れたマクベスとその妻を苛むのは、プロット上はダンカン王殺害を巡る、政治的野望と、その結果として生じる良心の呵責である。しかし、『マクベス』のテキストにおいては政治的な野望はことごとく性的メタファーに置き換えられ、自然的身体インポテンスが皮肉にも継承されないマクベスの王権を映し出す鏡となる。それはちょうど、第2幕第3場の冒頭、門番（porter）が述べる酒の比喩に似ている。門番は酒の三つの「功德」について以下のように語る。

そうですね、赤鼻と睡魔と小便でしょう。酒ってやつは色気（Lechery）を誘って引っ込ませる。欲望（desire）を掻き立てておいて、事（performance）をやらせない、それじゃ大酒のみは、色気に二枚舌を使うってことになりますな。男にするし男をだめにする、やらせようとしてやらせない、その気にさせて萎ませる、立たせておいて立たなくさせる。結局、眠っている間に二枚舌で騙して、去ってしまうんです。

Macbeth, 2.3.27-31

酒は欲望を喚起させ、いざというときに行為を行わせない。この門番たちの台詞が語る性的不能のイ

メージは、魔女の二枚舌によって欲望を喚起されるだけの着点のない欲望、消費されるだけで継承されない『マクベス』という自己愛のドラマのパロディそのものである。初期近代において理想とされた国王の不可視の政治的身体は、『マクベス』においては主人公の「屈辱の身体」によって舞台上に可視化されることになる。

NOTES

1. 国王の身体の不可視性については、カントロヴィチの第2章「シェイクスピア—リチャード二世」(pp.24-41)を参照せよ。
2. ジェイムズはこのほかにも、“*A Speech to the Lords and Commons of the Parliament of Whitehall [1610]*” および “*The True Law of Free Monarchies [1598]*” において、「国王は国民の政治上の父親である」と述べており、初期近代において王位は父権制によって束ねられるものであったことがわかる。
3. バンクォーとフリーアンスが単数扱いされていることも、その一心同体性の証左である。(Thou knowest that Banquo, and his Fleance, lives. 3.2.36)
4. マクベス夫妻の子どもについては多くの議論が行われてきた。おもにA.C.ブラッドリーの性格類型批評を批判するかたちで論じられたL.C.ナイト (Lionel Charles Knights) の*How Many Children Had Lady Macbeth?* (1933) などが挙げられる。
5. イギリスの貴族と農民の子どもたち全体の4分の1ないし3分の1は、15歳までに死んでいた(Stone, 48)。
6. 同性愛者と魔女はともに、その存在が社会の安寧を脅かす危険な逸脱者であるとみなされていた(Stone, 411)。
7. 女性器は外部に出損なった男性器とみなされていたルネッサンスのワンセックス・モデルにおいては、男性と女性は種類の違いではなく程度の違いとされていた。男性と女性の間境界は基本的には政治的なものであり、そこでは性差と性的欲望についてなされる主張も、生物学的な意味より修辭的な意味の方が重要である、とトマス・ラカーは主張する (Laqueur, 35)。
8. ジェイムズ一世にしてみれば、マクベスのセクシュアリティが異常であればあるほど、自らのルーツであるマルコムとフリーアンスの正統性が浮き彫りになる。
9. キース・トマスによると、既婚のカップルが子供を持たない決意をすることも、公然と承認されることはなかった。子孫づくりに関わらないセックスの正当性は、広く疑問視され、寡婦の再婚には、いつも非難がましい空気が流れていたし、とりわけ、本人が子供を産めない年齢になっている場合には、強い批判があった (Thomas, 21)。

Works Consulted

- Barmazel, Julie. “The servant to defect”: Macbeth, impotence, and the body politic, in *Macbeth: New Critical Essays*.
- Barrough, Philip. *The Method of Physic, Containing the Causes, Signs, and Cures of Inward Diseases in Man’s Body from the Head to the Foot*. 3rd ed. London, 1596.
- Bate, Jonathan and Eric Rasmussen, Ed., *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works*. Basingstoke: Macmillan, 2007.

- Cressy, David. *Birth, Marriage & Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England*. Oxford: Oxford Univ. Pr., 1997.
- Holinshed, Raphael. *The Chronicles of England, Scotland, and Ireland*. 1587. 6 vols. London, 1808.
- Jorden, Edward. *A Briefe Discourse of a Disease Called the Suffocation of the Mother*. London, 1603. Reprinted in *Witchcraft and Hysteria in Elizabethan London: Edward Jorden and the Mary Glover Case*, Ed., Michael MacDonald, n. p. London: Routledge, 1991.
- Kantorowicz, Ernst H. *The King's Two Bodies: A Study in Medieval Political Theology*. New Jersey: Princeton Univ. Pr., 1957.
- King James. *Political Works*. Ed. Charles Howard McIlwaine, Cambridge: Harvard Univ. Pr., 1918.
- Kramar, Heinrich and James Sprenger. *The Malleus Maleficarum*. Trans. Montague Summers. Reprint. New York: Dover, 1971.
- Laqueur, Thomas. *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*. Cambridge: Harvard Univ. Pr., 1990.
- MacDonald, Michael. *Mystical Bedlam: Madness, Anxiety, and Healing in Seventeenth-Century England*. Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1981.
- Moschovakis, Nick. *Macbeth: New Critical Essays*. New York: Routledge, 2008.
- Paster, Gail Kern. *The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England*. Ithaca: Cornell Univ. Pr., 1993.
- R. Schofield and E.A. Wrigley. 'Infant and child mortality in England in the late Tudor and early Stuart period', in C. Webster (ed.), *Health Medicine and Mortality in the Sixteenth-Century*. Cambridge, 1979.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir, The Arden Shakespeare, 2nd Series. London: Methuen & Co. Ltd., 1951.
- , *Macbeth*. Ed. Sandra Clark and Pamela Mason, The Arden Shakespeare, 3rd Series. London: Methuen & Co. Ltd., 2015.
- Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1977.
- Thomas, Keith. *The Ends of Life: Roads to Fulfilment in Early Modern England*. Oxford: Oxford Univ. Pr., 2009.
- Wrightson, Keith. *English Society 1580-1680*. London: Unwin Hyman, 1982.
- Vicary, Thomas. *The Anatomy of the Bodie of Man*. 1548. New York: Kraus Reprint Co., 1973.
- Williams, Gordon. *A Glossary of Shakespeare's Sexual Language*. New Jersey: Athlone, London & Atlantic Highlands, 1997.